

令和3年度 アーツアカデミー 東京芸術劇場
プロフェッショナル人材養成研修

シアター・コーディネーター養成講座

10代から考える《ドラマトゥルギー編》

レポート

2021年7月31日（土）～11月20日（土）実施

東京芸術劇場の「シアター・コーディネーター養成講座」では、プロフェッショナル人材養成の一環として劇場を広く社会に開き、芸術文化を通して地域・社会づくりに貢献する人材育成を目指しています。

この「10代から考える《ドラマトゥルギー編》」では、シアターオペラ『夕鶴』（新制作）でドラマトゥルクを務める講師と作品創作のプロセスを共有しながら、作品を観客に届けるためのより良い仕組みを受講生の皆さんと一緒に考えました。

目次

1. 講座内容・各回レポート	P3
第1回 7/31（土）基礎編1（ドラマトゥルギーとは）	3
第2回 8/21（土）基礎編2（ドラマトゥルクの仕事）	4
第3回 9/18（土）基礎編3（作品と観客をつなぐ）	5
第4回 10/16（土）開発編1（企画を考える）	6
第5回 10/23（土）開発編2（中間発表）	7
第6回 10/30（土）特別編（シアターオペラ vol.15『夕鶴』鑑賞他）	8
第7回 11/20（土）開発編3（最終発表＋フィードバック）	8

2. 受講生によるアフターインタビュープロジェクト P9

1. 受講生のアフターインタビューマップ
2. 講師 横堀応彦氏 インタビュー
3. 受講生からの問いへの応答

＜開かれたドラマトゥルギー＞に向けて テキスト：横堀応彦
マップデザイン：矢羽田和 インタビューテキスト：井形翔子
企画・インタビュー・編集：豊島淳子

※事業データ

実施期間：2021年7月31日（土）～11月20日（土）（全7回）
講師：横堀応彦氏 受講者：全15名（一般8名、学生7名）
受講料：一般10,000円、学生5,000円 ※『夕鶴』（10/30）チケット代金を含む
主催：公益財団法人東京都歴史文化財団 アーツカウンシル東京・東京芸術劇場
助成：文化庁文化芸術振興費補助金（劇場・音楽堂等機能強化推進事業）
独立行政法人日本芸術文化振興会

令和3年度アーツアカデミー 東京芸術劇場
プロフェッショナル人材養成研修

東京芸術劇場 シアター・コーディネーター 養成講座

10代から
考える

ドラマトゥルギー編

期間——2021年7月～11月[全7回] | 会場——東京芸術劇場内

受講料——一般 10,000円(税込)/学生 5,000円(税込)(高校生以上) ※シアターオペラvol.15「夕鶴」10/30チケット代金を含む

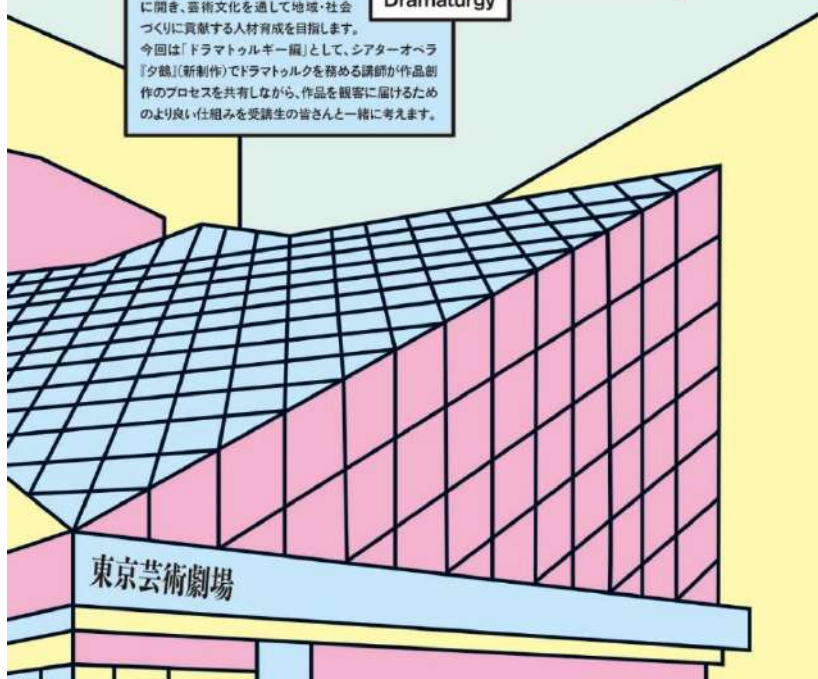
応募締切——7月5日(月) 12:00

東京芸術劇場の「シアター・コーディネーター養成講座」では、プロフェッショナル人材養成の一環として劇場を広く社会に開き、芸術文化を通して地域・社会づくりに貢献する人材育成を目指します。

今回は「ドラマトゥルギー編」として、シアターオペラ『夕鶴』(新作)でドラマトゥルクを務める講師が作品制作のプロセスを共有しながら、作品を観客に届けるためのより良い仕組みを受講生の皆さんと一緒に考えます。

Theatre Coordinator Training Course

Dramaturgy



Theatre Coordinator Training Course

Dramaturgy

講師 横堀応彦 (よこほり まさひこ)

東京藝術大学大学院音楽研究科博士後期課程修了。ライブツィヒ音楽演劇大学においてドラマトゥルギーを専攻。フェスティバル/トーキョー、TPAM(国際舞台芸術・デザイン) 横浜、東京芸術劇場などでプロデューサーやコーディネーターとしての活動を行いながら、フリーのドラマトゥルクとして活動。参加した作品に「妖精の問題」(作・演出 市原佐都子)など。現在、跡見学園女子大学専任講師、立教大学兼任講師。

終演後に「今日観た作品は何かしたいのかよく分からなかったな…」という感想を抱いて劇場を後にした経験はあるでしょうか。あるいは作品を制作した際に「やろうとしていることがどれだけ観客に伝わっているのかな…」と不安になった経験はあるでしょうか。この講座では、そのようなモヤモヤとした経験を共有することを手掛かりに、作品と観客が良い形で出会うための仕組みを参加者の皆さんと一緒に考えていきたいと思います。なお、この講座は作品の制作に関わるドラマトゥルクを養成するものではありませんが、今回は私がオペラの新制作にドラマトゥルクとして参加するタイミングなので、そのプロセスも随時お話ししたいと思います。

シアター・コーディネーターとは？

劇場と社会の間に立ち、両者をつなぐための企画を考えたり、調整したり、発信したりする人たちのイメージした名称です。下記のような資質を複合的に活用できる人材を募集します！

- ・プログラムを開発するプランナー
- ・教育的視点を持ったエデュケーター
- ・運営に携わるマネージャー
- ・企画やエピソードを横断的に考察し、工夫するドラマトゥルク
- ・サービスを熟知するコンシェルジュ

応募資格

- ・15歳以上の方(2021年4月1日時点、中学生を除く)で、日本語で日常会話ができる方
- ・劇場や舞台芸術またはコミュニティ等に関心があり、積極的に学び、活動意欲のある方
- ・原則として講座全7回に全て出席、またはオンライン(同時双方向型)で参加可能な方
- ・10月30日(土)に東京芸術劇場でシアターオペラvol.15「夕鶴」の鑑賞が出来る方
- ・インターネット環境をお持ちで、Eメール・Facebook・Zoom等で連絡・受講が可能な方

スケジュール

回数	日	時間	内容
第1回	7月31日(土)	13:30-16:30	基礎編1(ドラマトゥルギーとは)★
第2回	8月21日(土)	13:30-16:30	基礎編2(ドラマトゥルクの仕事)★
第3回	9月18日(土)	13:30-16:30	基礎編3(作品と観客をつなぐ)★
第4回	10月16日(土)	10:00-13:00	開発編1(企画を考える)★
第5回	10月23日(土)	13:30-16:30	開発編2(中間発表)★
第6回	10月30日(土)	14:00-18:30(予定)	特別編(シアターオペラvol.15「夕鶴」鑑賞ほか)
第7回	11月20日(土)	13:30-16:30	開発編3(最終発表・フィードバック)★

前半の基礎編ではドラマトゥルギーおよびそれを担当するドラマトゥルクという仕事について紹介し、後半の開発編では作品と観客をつなぐ方法について実際に企画を立てていきます。

★の講座は、オンラインによる受講も可能です(ご希望の場合は、応募時にご申告ください)。

定員: 10名程度 | 応募締切: 7月5日(月) 12:00 | 選考方法: 応募内容による選考。締切後、2週間以内に参加可否をお知らせいたします。

受講のお申込み

下記URLよりお申込ください。

<https://willap.jp/p/geigeki/tc202107/>

※お申込み時にいたく個人情報には本講座以外の目的には使用しません。

お問合せ：東京芸術劇場
TEL: 03-5391-2111(内線) メール: seminar@geigeki.jp

主催: 公益財団法人東京都歴史文化財団 アーツカウンシル東京・東京芸術劇場
※本プログラムの内容は、予告なく変更になる場合がございます。

全国共同制作オペラ 東京芸術劇場シアターオペラvol.15
園伊玖磨 / 歌劇『夕鶴』 [新演出]

2021年10月30日(土) 14:00開演
東京芸術劇場コンサートホール

指揮: 辻 博之 演出: 園田利規

<https://www.geigeki.jp/performance/concert233/>




講師プロフィール 横堀応彦

東京藝術大学大学院音楽研究科博士後期課程修了。ライブツィヒ音楽演劇大学においてドラマトゥルギーを専攻。ドラマトゥルクとして参加した作品にオペラ『夕鶴』(演出 岡田利規)、Q『妖精の問題』(作・演出 市原佐都子)等。フェスティバル/トーキョー、TPAM、東京芸術劇場等での制作業務を経て、現在跡見学園女子大学マネジメント学部専任講師。

レポート シアター・コーディネーター養成講座〈第1回〉

基礎編1 ドラマトゥルギーとは

日時 | 7月31日(土) 13:30—16:30

会場 | 東京芸術劇場ミーティングルーム (オンライン併用)

講師 | 横堀応彦



ドイツでドラマトゥルギーを学び、フリーのドラマトゥルクとして活動する横堀応彦氏が講師となる「シアター・コーディネーター養成講座《ドラマトゥルギー編》」の第1回。講座冒頭の自己紹介では、参加者それぞれに、自身の活動と講座で深めたい学びについての想いを語っていただきました。

講義では「ドラマトゥルギーとは?」「ドラマトゥルクの仕事とは?」という問いに対し、横堀氏がドイツと日本の識者の記述を参照しつつ、その多様なあり方を解説しました。舞台芸術のポストドラマ的な変容を受け、ドラマトゥルギーという言葉のあり方はますます複雑化しています。基礎編1～3では〈演目ドラマトゥルギー〉〈プロダクションドラマトゥルギー〉〈観客ドラマトゥルギー〉という3つの分類を元に、各回グループワークを行いました。今回は、2人1組となって〈演目ドラマトゥルギー〉の視点からグループワークを行いました。「具体的な地域をイメージして、劇場の年間プログラムを考えてみる」という課題に対し、参加者それぞれが自らの関心やバックグラウンドを生かした提案を行い、白熱したプレゼンとなりました。(文・豊島勇士)

基礎編1 (7/31)

- ・自己紹介
- ・ドラマトゥルギーとは?
- ・ドラマトゥルクの仕事
- ・グループワーク：演目ドラマトゥルギー

出典：講師作成スライド (次頁以降も同様)

受講者からのフィードバック (一部抜粋)

- ドラマトゥルギーについて考えることは、ドラマそのものの変化について考えることである、と学びました。テキスト中心主義から、より多様なその場所を構成している多様な要素を捉える必要があるという変化。世代や、時代によってドラマという認識が変化していくことを踏まえて、講師にとってのドラマという概念の変遷と、参加者の皆さんにとってドラマとはどんなもので、どんなイメージをお持ちなのかを伺ってみたいと思いました。
- 日本でドラマトゥルクを行うとしたら、劇場に所属するのか、カンパニー所属になるのか。(どちらにも所属せずフリーランスになるとしてオファーが来るのはどちら側からなのか)。実際、ドラマトゥルクという職業につこうとする際にどのような人脈を作っていくのが重要なのか。ドラマトゥルクという仕事は日本で食べていける職業なのか。
- 結局日本は、ドラマトゥルクの役割をプロデューサーや制作さん広報さんが担当していると理解しています。ドイツと違い、日本においてドラマトゥルクがなかなか浸透しないのはなぜなのでしょう...? 劇場の性質の違いなど様々な理由はあると思いますが、現状の日本の仕組みでは専門家としてドラマトゥルギーを扱うドラマトゥルクは求められないのでしょうか。
- 今のドラマトゥルギーと呼ばれるものは、日本の舞台芸術界隈の現場で実際に行われているプロデューサー／ディレクター／制作の役割とかなり被るところがあると感じた。例えば、私個人の活動のみに言及しても、今迄のダンス活動で行ってきたことがドラマトゥルクとも呼べてしまうと思った。
- 講義内で質問のあったチラシのクレジット名目について、ダンス界隈でも似たようなことが生じており、現場の認識と、観客の認識、または制作の認識が乖離していると感じる。またそれぞれが持つクレジットの名目イメージがそもそも違うことについて、関係者としては問題意識を感じている。(例：演出と振付と出演とステージング)
- 「人」ではなく「場所」にお客さんが集まるような劇場が増えるといいなと思いました。

基礎編2 ドラマトウルクの仕事

会場 | オンライン



講座冒頭では、前回講座終了後に受講者から寄せられたフィードバックを確認していきます。「プロデューサー・制作者と役割が重なる」「ドラマトゥルクとしてチラシに記載されていても現場によって認識が異なる」などのコメントから浮かび上がるのは、「どこからどこまでがドラマトゥルクの仕事なのか？」という問いかけです。

基礎編 2 (8/21) オンライン

- ・コメントのフィードバック、「夕鶴」熊本WSの報告
- ・日本におけるドラマトゥルクの10年
- ・ドラマトゥルクの仕事
- ・ドラマトゥルクたちの言葉
- ・グループワーク：プロダクションドラマトゥルク

受講者からのフィードバック（一部抜粋）

○ドラマツルギーは最初の観客ということで、新たな目が必要とされると思いますが、何度も同じ演出家と仕事をしていると、演出家の演出に理解を持ちすぎて新鮮味がなくなる、といったことはないのでしょうか。また、ドラマツルギーとして作品を見るときに、どのような観点に着目をして意見を出すのでしょうか。（テーマの表現性、作品の完成度など）

○途中で出てきたアフタートークの話題は私も気になっています。私の尊敬している俳優は（中略）普段から演じる中で気付きを言葉にしてくれたり、作品について実際にお客さんと対等に語り合う会を開いたりしています。（中略）アフタートークが作品を深めたり議論の場になるという意識が広まればいいなと思うし、そんな場が増えて欲しいなといつも考えています。

○舞台制作に本格的に関わったことがありませんので、舞台の企画から公演までの流れに沿って
 ドラマトウルクの関わり方をお話いただけたのは非常にわかりやすくイメージが湧きました。

レポート シアター・コーディネーター養成講座〈第3回〉

基礎編3 作品と観客をつなぐ

日時 | 9月18日(土) 13:30—16:30

会場 | 東京芸術劇場ミーティングルーム (オンライン併用)



基礎編の最後となる第3回目は、グループワークを中心に、〈観客ドラマトゥルギー〉について考える回となりました。

今回も冒頭では、前回の講座で受講者から寄せられたフィードバックを確認していきます。それを受け「ドラマトゥルクとして、どう観客を意識しているか」「演出やドラマトゥルク等の役割の範囲とクレジット表記の関係性」など、受講生からの新たな疑問や質問が活発に飛び交いました。

その後、「作品と観客をどうつなげていくか」というテーマで、レクチャーとグループワークが行われました。グループワークでは、今回のシアターオペラ「夕鶴」を例にアイデア出しを行い、受講生の興味に基づいて「創作過程の公開」「アフタートーク」「ワークショップ」「レクチャー」のグループに分かれてその具体例をディスカッションしました。受講生からは、インスタライブ／ラジオ／副音声／タイムラプス／原作のレクチャー／カヴァーキャスト／クリエイションとコミュニケーションのアーカイブ／オープンソース化等々、様々なトピックが提案されました。

基礎編3 (9/18)

- ・コメントのフィードバック
- ・「夕鶴」児童合唱WSの報告
- ・作品と観客のつなぎ方とは？
- ・グループワーク：観客ドラマトゥルギー

受講者からのフィードバック (一部抜粋)

○観客ドラマトゥルギーについてのグループワークが本当に興味深かったです。すぐに実現できそうなアイデアもあれば時間のかかりそうなアイデアもあったけど、思い返すと私が関わった劇団では今まで「どのように観客に届けるか」実践できなくとも、考えることすらすっぱり抜け落ちていたような気がします。つい公演をなんとか千秋楽まで終わらせることで頭がいっぱいになりがちですが、演劇は誰かに届かなければ意味がない。届けるためのやり方も工夫も、いくらだってある。視野が少し広がりました。と同時に、こういうふうにし少し外からプロダクションを眺めて伝えるための提案をするのが観客ドラマトゥルギーなのだと、改めて理解できました。

○いつも質問に丁寧に応えていただき、大変ありがとうございます。受講のみなさんの質問も、どきりとするものが多く、学生の方も社会人の方も、クリエイションに関わる方もさまざまな方がいることの幅の広さを感じています。受講後振り返る時の思考のきっかけを頂いています。

○制作の方々のリアルなお話も併せて、舞台芸術の可能性を以前よりも強く感じました。パンフレットの工夫やインターネットの利用など、観客と作品とを更に結びつけるアイデアが沢山出ていて勉強になりましたし、面白かったです。

○みんなの質問がとにかく面白い。それぞれそれぞれについて互いにどう思うか、意見共有して議論しがいがある内容。

レポート シアター・コーディネーター養成講座〈第4回〉

開発編1 企画を考える

日時 | 10月16日(土) 10:00—13:00

会場 | 東京芸術劇場リハーサルルーム (オンライン併用)



第3回までは、基礎編としてドラマトゥルギーの仕事についてのレクチャーが中心でしたが、今回からは開発編として、作品と観客が出会う企画を、段階を踏みながら考えていきます。まずは、前回から今回までの1ヶ月間の「夕鶴」制作プロセスの説明がありま

した。オペラに関わる人達のそれぞれの役割について、感染対策が演出面に与える影響について、ドラマトゥルクとしての関わり方等が話されました。そして、初回に続き2回目となる受講者の自己紹介を実施しました。最近観た舞台や実際に参加した企画、自身の仕事に関連することを中心に自己紹介がなされ、受講者と本講座との接点がより増える機会となったようです。ここで話題となったのが、「劇場や作品へどうアクセスしやすくするか」です。チケット料金の設定や、作品情報のシェアの仕方、託児サービス、多様性とキャスティングなど、様々な視点から議論され、これらを後半のグループワークの企画を考えるための手がかりとして、講座は進められました。

グループワークのテーマは、作品と観客を繋げる企画のアイデア出しです。作品を見る前にこういうことを知っていると良い、という点を議論しました。今回のワークで出されたアイデアをもとに、次回の講座では「夕鶴」プレトークとして横堀氏がレクチャーを行い、その後の「夕鶴」の観劇につなげるという流れが提示されました。

開発編1 (10/16)

- ・コメントのフィードバック
- ・この間の「夕鶴」の動き
- ・参加者のみなさんからの話題提供
- ・企画を考えるための手がかりとして
- ・グループワーク：「夕鶴」を見る前に知りたいこと

受講者からのフィードバック (一部抜粋)

- 皆さん舞台芸術が好きな方々ということで、お互いに共感できる部分が多く、話し合いも充実していました。次回からは観客ドラマトゥルギーに関するアイディアを実際に育てていくということで、どんな意見が出るのか、また自分のアイディアがどのように膨らむのか、今から楽しみです。
- 他の受講生の方々の活動の様子を聞くことができ、とても楽しかったです。もし可能であれば、次回以降に受講生同士が交流するような時間を取っていただけると、嬉しいです。
- ドイツの劇場は日本みたいに女性多めでなく男女均等、また一人で行く文化でもない、一人暮らしという感覚がなかったり、電車も団体で乗った方が安いなど、初耳情報で参考になりました。
- 今回の講座はとても印象的でした。参加の皆さんがどんな方々なのか。熱量をどこに向けていらっしゃるのか。違和感をどこに感じていらっしゃるのかがリアルに感じられて、引き込まれてしまいました。特に、「劇場に緊張感を感じる友人の話から、そういった『文化をほぐす』ほぐしていかないといけない」や、「わからなさの尊重とつくり手の受け手とのズレの認識」のおはなしが印象的でキーワードをもらいました。

レポート シアター・コーディネーター養成講座〈第5回〉

開発編2 企画を考える

日時 | 10月23日(土) 13:30—16:30

会場 | 東京芸術劇場リハーサルルーム (オンライン併用)



今回の講座の前半では、前回の講座をうけて、横堀氏による「夕鶴」事前レクチャーが行われました。

まず、なぜこの企画が実施されることになったのか、という点についてのレクチャーがありました。木下順二の戯曲「夕鶴」に團伊玖磨が音楽をつけ誕生したオ

ペラ「夕鶴」は、著作権がきれていないため改変ができず、凝った演出がなされるケースがあまりなかった。そこに切り込もうというプロデューサーの考えがあったというお話でした。また、過去に上演された「夕鶴」の映像を見ながら、あらすじ、つうの音楽について、オペラの始まり方や鑑賞する際のポイント、拍手のタイミング等の説明。そして、別の映像を用いて今回演出を務める岡田利規氏の演出についての説明もありました。

その後のグループワークでは、レクチャーを聞いての感想、わからなかったこと、聞きたいこと、などを挙げていきます。「ダンサーがキャスティングされていることが気になった」「中にいないと具体的に何を伝えるべきかということがわからない」「オペラを日常的に見る人は何を楽しみにみているのだろう？」等、実際にレクチャーを受けたことで、より多く考える機会となり、参考になったようです。

最後に、グループで最終発表のアイデアの話し合いがあり、その後、個々に最終発表のイメージを話していただく時間が設けられました。ドラマトゥルギー的な考えとはどういうものか、どこまで情報を公開するのか、チケット料金について等、講座を通して受講者が気になるトピックを共有しました。

開発編2 (10/23)

- ・コメントのフィードバック
- ・「夕鶴」事前レクチャー
- ・グループワーク：事前レクチャーはどうだったか？
- ・最終回で発表するアイデアの発表

受講者からのフィードバック (一部抜粋)

○先回横堀さんに今回上演される「夕鶴」について事前情報を伺い、講座の企画についてを思考の片隅に置きながら、「夕鶴」について考えている。今週は、今までにない舞台を観に行く前の感覚です。「夕鶴」の舞台と、ずっと一緒にいるような感覚で不思議です。

○夕鶴のメインフレーズや舞台美術のことなど、見るべきポイントを解説してくださったおかげで鑑賞がより楽しみになりました。これを一般向けに解説講座として開催したら来てくれる人はどのくらいいるのか、という問いは私も気になりました。分からない→行かないの構図を減らすために一般向けの鑑賞説明会を行うのは有意義だと私は思いました。

○夕鶴のレクチャー、とても参考になりました。しっかり知りたい情報のレクチャーを受けてから観劇した経験が少ない(というより、まずない)ので、明日は情報を知ってから観劇してみようだったか、自分で体験できるのでワクワクしています。観劇後皆さんと事前情報の提示も含めてどう感じたか、みっちりお話しできるのを楽しみにしています。

レポート シアター・コーディネーター養成講座〈第6回〉

特別編 シアターオペラ vol.15『夕鶴』鑑賞ほか

日時 | 10月30日(土) 17:00—18:30 (終演後)

会場 | 東京芸術劇場ミーティングルーム



第6回は、特別編として、『夕鶴』を鑑賞、その後、会議室に場所を移して1時間半程の講座を行いました。今回の講座では、講師が講座の内容を示していくのではなく、受講生自身が案を出しながら、どのような流れで本日の講座(アフタートーク)を進めるのかを決めていきました。複数のアイデアの中から方向性が定まらず、多少ひりひりする場面もありましたが、まずは全員の感想や気になる点などを話し、その内容をもとに4つのグループに分かれ、ディスカッションを行いました。

以下、講座内で発言のあった受講者の感想を抜粋。

- オペラの初めての方にとって、身体的にこの時間はどうだったのかが気になった。
- 作品を見る位置・客席が重要だと思った。
- すぐに言語化するのはむずかしい、でも時間が経つと忘れてしまう。
- 場のセッティングの仕方が難しい。初対面の人たちと話すこのような場は貴重。
- 作る側にフィードバックされる機会がほとんどない。
- プレトークやチラシ等の事前資料で、誰を対象に何を言えばいいのかを考える機会となった。

レポート シアター・コーディネーター養成講座〈第7回〉

開発編3 最終発表+フィードバック

日時 | 11月20日(土) 13:30—16:30

会場 | 東京芸術劇場リハーサルルーム



最終回となる第7回は、これまでの講座を踏まえて、受講生による企画発表です。最初に横堀氏より、7月からの講座で話されたことについて、1回ずつ丁寧な振り返りがあり、その後、前半・後半に分けての発表となりました。会場での

参加の方もいらっしゃれば、オンラインでの参加、また当日欠席のために映像で参加された受講生もいらっしゃいました。受講生それぞれの角度から練られた企画の発表が続き、それぞれの知見からのフィードバックも加わり、大変活発な場となりました。

受講生の企画発表(一部抜粋)

- 鑑賞ワークショップ 劇場における「コミュニティ」を深化させる
- 「考えさせられた」展(終演後の感想や批評文を募集・サイト掲載、演出家によるトークイベントを開催)
- 足を運ぶきっかけをつくる「著名人のサポーター」・考えるきっかけを残す「台詞のテイクアウト」・深めるきっかけを提供する「登場人物の掘り下げ会」
- After-Walk
- 舞台作品という箱が作品からも、観客からもどちらからもポジティブにひらくための基盤を育てるプロジェクト「OPEN THE BOX」
- My Home Theater Project(観客ひとりにつき My 劇場を登録、特典などを得られるシステム)

受講生による アフターインタビュープロジェクト

- -Contents-
- 1. 受講生のアフターインタビューマップ
- 2. 講師・横堀応彦氏 インタビュー
- 3. 受講生からの問いへの応答
- 「ドラマトウルクとして
- 今後10年どんな活動をしていきたいですか」
- <開かれたドラマトウルギー>に向けて
- テキスト/ 横堀応彦

-プロジェクトチーム-

マップデザイン	矢羽田和
インタビューテキスト	井形翔子
企画・インタビュー・編集	豊島淳子

作成 2022年3月31日

企画詳細

・インタビューシート
(6項目) 回答(8名)

・オンライン座談会 +
ミニインタビュー開催
第1回3/4(5名)
第2回3/5(3名)

→上記2点を編集。
問いごとに受講生の声をまとめた「アフターインタビューマップ」を作成

・受講生から集まった問いを中心に講師へのインタビューを実施 3/14

・講師インタビューからさらに深く聞きたい、問いについてのテキスト執筆を依頼

「受講生によるアフターインタビュープロジェクト」

講座で重点的に学んだ「観客ドラマトウルギー」を基盤に、受講生が講座からどんなことを受けとりその後どう変化したのかを収集し、伝える企画。

シアターコーディネーター養成講座〈ドラマトウルギー編〉 受講生によるアフターインタビュープロジェクト

アフターインタビューマップ

- ・インタビューシート（5項目）回答（8名）
- ・オンライン座談会+ミニインタビュー開催
第1回3/4(5名) 第2回3/5(3名)
→上記2点を編集し
問いごとに受講生の声をまとめました

フレームカラー

-  : 社会人受講生
-  : 学生受講生

隣り合うフレームは関連性の強いものを配置しています



マップデザイン・イラストレーション 矢羽田和
インタビュー企画進行 豊島淳子

① 講座の受講動機を教えてください

ドラマトゥルギーについて知りたかったので

「観客」ー「地域」ー「舞台」とを結び続けることについて興味があったため

演劇を仕事にする際
ドラマトゥルクがどのような役割なのか実際に知りたかった

将来的に何かしらの演劇の仕事に就きたい

それはどういう関わり方なのかと思った時に講座を見つけて、将来の選択肢の一つとして具体的に知りたかった

新潟市民芸術文化会館からほど近い場所のBook Barとして

劇場と人との良い形で結ぶことができる場所をまちなかで構築したいと考えているため

演劇を仕事にしたい

ドラマトゥルクを将来の仕事の一選択肢としてもっと知りたかった

ドラマトゥルクに対する好奇心から

劇場で仕事をしていることもあり、作品を上手く伝えられるようになりたかった

舞台芸術を多くの人にとってより身近なものにしたい

日本の演劇を劇場を拠点としてどう変えていくべきかを探りたかった

ダンスと社会をつなげたく活動しています

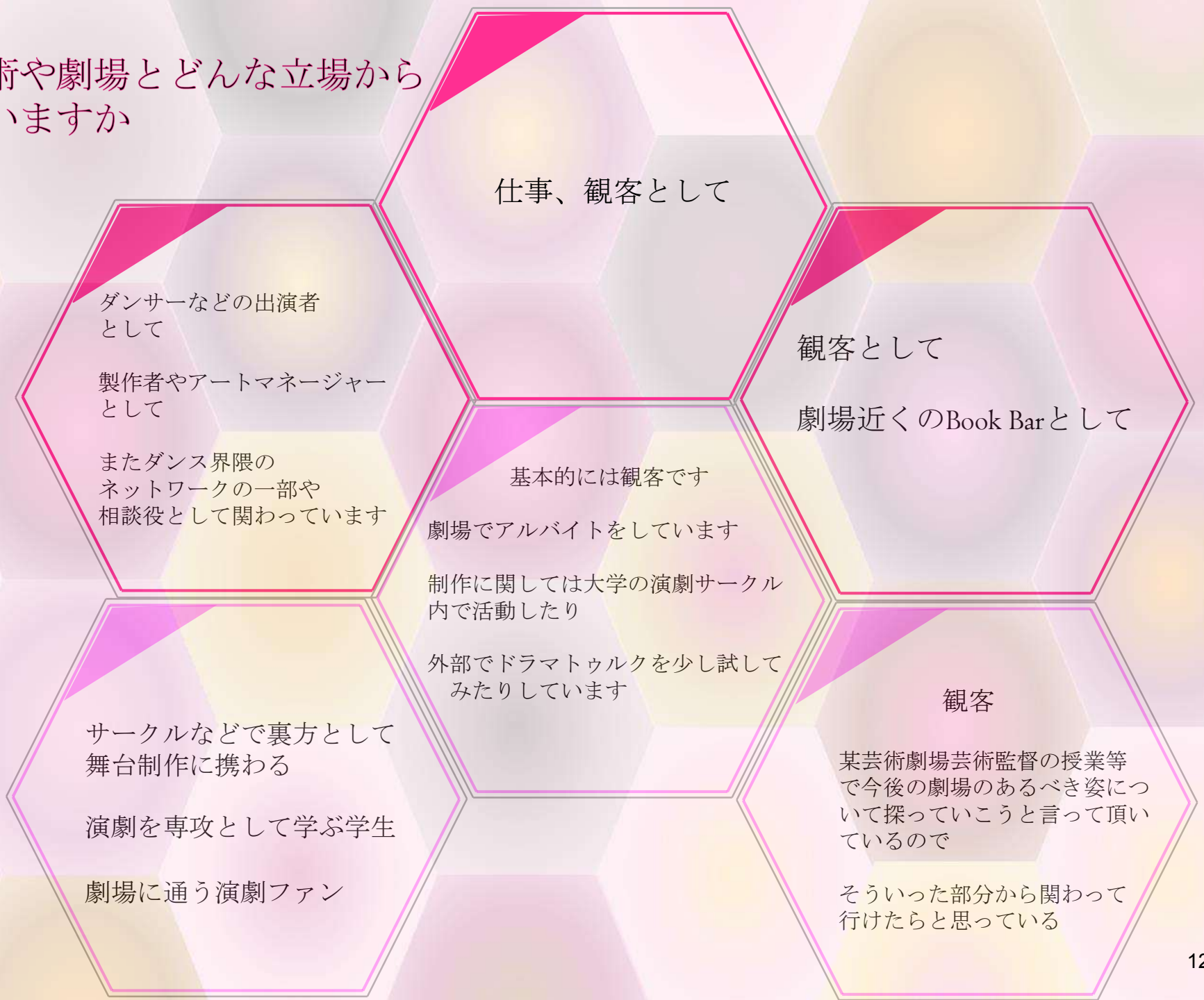
ダンスは言葉を使わない抽象的な傾向が強い表現手段ゆえに、社会とダンスの間に何かわだかまりがあるのではないかと感じる時があります

もしくは、今の日本で確立されているダンスのステイタスは良い方向に改善や変化できると信じています。そのためにダンスとその周りに関わる環境を改善するべく活動しています

一方で、ダンスを通して舞台芸術に携わりながら「ドラマトゥルギー」という言葉が何年もの間自分の中で重要なキーワードの一つになっています。近年よく耳にする言葉になりつつもその実態が何なのかまだ理解できていません。最近はダンスドラマトゥルギーという言葉まで現れました

私はこの得体の知れない役割に何かダンスと社会の距離をより縮める力があるのではないかと感じます
その答えは分かりませんがこの講座を経て、自分の目標に向けて何かしらの手掛かりを掴むことができればと思い応募しました

② 舞台芸術や劇場とどんな立場から関わっていますか



③ 舞台芸術や劇場に関心を持つようになったきっかけと熱量を持つようになった決め手を教えてください

高校生の時に『俺節』という舞台を観て、「将来これを創りたい」と気持ちを突き動かされたことがきっかけです

色々な舞台を観に行くようになり好きな劇場が出来てからは作品だけでなく劇場にも興味を持つようになりました

きっかけはダンスを有効活用する手段の一つが舞台芸術や劇場だったからです
私の場合は舞台芸術や劇場に関心を持つというよりダンスに従事した結果その現場先が舞台芸術や劇場でした

つまり、ダンス現場の一つとして舞台芸術や劇場がありそこにダンスと密接な関係があると思います

なので熱量はダンスであり、ダンスの熱量が関係のある舞台芸術や劇場に飛び火している状態です
ダンスへの熱量の決め手は一言では語れないので省きます

小さい頃から演劇のスクールに通っていたので舞台を身近に感じていたこと

また、劇場という存在が大好きで自分で“開かれた劇場”というものを設計したいと思ったこと

学生時代に野田地図「半神」の映像を観て、どうしてこんなものが創れるのかを知りたくて、劇研に入り旗揚げ

企画をイチから立ち上げて形にする道のりの面白さ

小学生の頃から家族に連れられて舞台をよく観ていたが中学2年生の時に劇団四季のオリジナルミュージカル「李香蘭」を観て

小学生の頃にミュージカルを観て

その後、高校生の時に槇村さとのさんの漫画を読み再び興味を持ち、ブロードウェイに憧れました

中学一年生のときに中村勘三郎さんのドキュメンタリーを見て「こんな面白いことをする人がいるのか!」と思ったことがきっかけで歌舞伎に関心を持つ
そこからミュージカルや他の演劇にもふれるようになったが、決め手となったのは高校一年生の時に「ラ・マンチャの男」を観たこと

④ 講座で印象深かったことをそれぞれの立場から教えてください

A 【作品を観客に伝える側として】

B 【いち観客として】

A 【今までは作品の伝え方という部分ばかり見ていたが、それ以前にチケットの値段や公演スケジュールの組み方など伝える以前にやるべきことが沢山あるということ意識するようになった】

B 【公演にドラマトゥルクとして関わっている人のお話を事前に聞いたり作品の背景を少し知っているだけで舞台の見え方(特に今回はオペラということもあり)がこんなにも変わるものなのかいうことに驚いた。観劇の場でワンアクション何かあるだけで(アフターウォークやテイクアウトの案など)きっとその体験が自分の中に強く残るだろうと感じた】

A 【夕鶴観劇後のワークを行った時間と空間。講座で共有していた時間や情報が観劇中のセンサーと後の言語化を導いていた実感】

B 【観客にも舞台をより良く観るために準備できることがあるということ】

A 【社会を構成する要素の一つとして劇場が果たすべき役割に関心を持つようになった】

B 【初見の作品の観劇前に作品をリサーチする方法の手がかりを得たと感じている。またその中で、作品の大枠を掴む方法が分かったように思う】

グループワークでの他の方の発表を聞いていると即興で出たとは思えない知識量や面白さがあってとても勉強になった

夕鶴観劇後の話し合いはとても印象的

A
【グループワークや夕鶴のあとの皆さんとの座談会】

B 【観客として事前知識の有無で舞台の楽しみ方が変わることを改めて認識できた】

A 【夕鶴の事前レクチャーを受けた際に感じた、共有すべき情報と共有しない方が楽しめる情報の線引き。共有した方がいい情報は情報を出すタイミング】

B 【ドイツの劇場と日本の劇場の違い】

様々なバックグラウンドの人が参加していたことで色んな意見が聞けたこと経験に裏づいた横堀さんの話がドラマトゥルクらしさなのか、彼の姿勢なのかわからないが物語っていた印象がありとても勉強になった

⑤ 受講をきっかけとして、行ったアクションやこれからしてみたいことをそれぞれの立場から教えてください

以前まではプログラムのあり方やアフタートークを楽観的に捉えておりましたが、夕鶴観劇後の座談会を通して、知らない者同士が意見を交換することは非常に難しいということを実感し、作品を伝える立場としては、それらをよく検討して企画していきたいと思いました。

A【世田谷パブリックシアターのSPTラボラトリーの中で、この講座で感じたことを共有した】

B【作品そのものだけでなく、この作品を作り手がどのような思いで伝えようとしているのか想像するようになった。商業として演劇を上演するだけではなく、人々の広場として人が集まり、何かをつくる場所としての社会機能を持つ劇場の側面も視野に入れて考えるようになった。

仕事として演劇に関わることを考えた時に、制作やドラマトゥルクといった稽古場から近い場所を見ていたが、例えば民間の不動産業でエンターテインメントを中核としたまちづくりに関わったり、行政側から芸術支援をすることもまた、演劇に携わることなのではと思うようになった。

B【建築や街づくりの観点から日本で演劇をはじめとする舞台芸術をもっと身近なものにしたい、ということは昔から漠然と思っていたが、そういった大きなことよりもまずは身近なところから行動を起こすことの大切さを痛感し、周りの友人に演劇を勧めたり一緒に観劇に行くようになった。

また、観劇の際に少し早めに行きお客さんを観察したり、公演パンフレットを読み込んだりするようになった】

A【何か作品について考える場は持ち続けようと、今は劇団の長期ワークショップや戯曲の制作にドラマトゥルクで参加しています。ゆくゆくは劇場と人を繋ぐことをしてみたいけれど、まずは人と作品を繋ぐ仕掛けを考えてみたいと思っています】

B【劇場の年間プログラムの構成や公演以外で行っている企画に目が向くようになりました。舞台を観にいても客層やロビーに置かれているフォトブースなどの仕掛けが気になります。】

A【「Bar for the theater Day」劇場に行った帰りにバー立ち寄りませんかという当店のささやかな企画。継続します】

B【「古典戯曲を声に出して読む会」を友人とオンラインでスタート。古典の底力に必ず触れられる場所を少しずつ構築していきたいです】

A【作品を観客に伝える側として】
B【いち観客として】

A【劇場職員としては、他劇場のセミナーや研修にも参加して他の施設の方とやりとりをすることで、自分の意識の在り方を狭めずに幅広に見て、情報を吸収する意識を持つようになりました】

B【観る側としては、興味を持つジャンルが少し広がったかなと思います。これまで現代演劇というか小劇場での作品はあまり観る機会がなかったのですが、下北沢の劇場やダンスの公演にもアンテナを張るようになりました。

舞台を観るときも、今までは受動的に観ていることが多かったのですが、ここがいいなというのを言葉として残せるように、自分の中で持っておくことを意識するようになりました】

講師 横堀 応彦さん インタビュー



今回の講義で初めて「ドラマトゥルギー」に触れる受講生も多い中、歌劇『夕鶴』（新演出）でドラマトゥルクを務めた講師の横堀さんにクリエーションの現場の様子を交えてお話しただけことで、現場で求められる役割やそのやりがい、また難しさについても理解が深まりました。全7回の講義を終えて、横堀さんにも今回の講義について振り返っていただきました。

一横堀さんが講座を担当することになった経緯を教えてください。

『夕鶴』のドラマトゥルクを担当することが決まった段階で、「ドラマトゥルクを養成する講座をやれないか」という相談を受けました。2000年代後半から、日本でもドラマトゥルクの仕事が少しずつ広まってきたように感じていたので、一人のドラマトゥルクとしてその意義を少しでも広めたり、関心を持ってもらったりする場があればいいと思いました。

とはいえ、私自身ドイツの大学院でドラマトゥルギーを専攻していたものの、現場に出てから学ぶことが非常に多かったドラマトゥルクという仕事について、座学が主になる「講座」を通じて、一人前のドラマトゥルクを養成することは難しいと感じたのが正直なところです。

日本では、ドラマトゥルクは演出家の補佐的な立場で作品と一緒に作り上げていく存在と捉えられがちですが、もっと幅広い仕事もその領域に含まれます。例えば年間を通じて劇場のプログラムを考えたり、観客と作品をどう繋ぐかを考えたりなどですね。劇場のプログラム作成のシミュレーションはできても、日本ではなかなか実践の場がありませんが、ドラマトゥルクの視点に立ち、観客と作品を繋ぐ方法について考えてもらうことは、講座が終わったあとも参加者の皆さんそれぞれの場所で応用し活かしてもらうことができるのではないかと、思いつきました。

終演後に「今日観た作品は何がしたいのかよく分からなかったな…」という感想を抱いて劇場を後にした経験、あるいは作品を制作した際に「やろうとしていることがどれだけ観客に伝わってわっているのかな…」と不安になった経験がある方、そういった方を対象に、ドラマトゥルギーの考え方を紹介しながら、実際に『夕鶴』の現場で起きていることもリアルタイムに伝えることで、作品と観客の間に補助線を引くためのお手伝いができればと思い、講座の内容を考えていきました。

一『夕鶴』の制作過程のお話は毎回の楽しみでした。進路の選択肢として「ドラマトゥルク」を考えている学生の受講生にとっては特に参考になったのではないかと思います。横堀さんが講座前に想像していたことと、実際に講座が始まって意外に感じたことはありますか？

全然参加者が集まらないんじゃないかと思っていましたが、60名ほどの応募が集まったことにまず驚きました。芸術劇場の広報が優秀だったんだと思います。

予め懸念していたこととしては、既にキャリアのある十分詳しい方が参加されることで、講義の専門性が高まりすぎてしまうことがありましたが、蓋を開けてみると学生をはじめ20代～30代の方が多かったのが嬉しかったです。面白い方が集まってくださったな、と思っています。

受講者の皆さんがリラックスして参加できる場づくりや時間配分の設計は、一つのドラマトゥルギーであるとも捉えられます。最低限必要な設計はしていたつもりですが、想定以上に皆さんが積極的に発言や質問をしてくださったり、参加者同士のワークでも時間が足りなくなるほど話が盛り上がっていたので良かったですね。

また、『夕鶴』観劇後の感想を共有する時間は、トークテーマや時間配分、進め方についても皆さんと一緒に決めていく形を取ってみました。うまくいくかどうかはさておき、考えてみることでやってみることが重要なので、面白い取り組みだったんじゃないかと思っています。

一あの時間は不思議でしたね、リラックスしつつ緊張感は保っているというか。別の場でも再現したいと思うような居心地のよさがありました。

皆さんにとって実りの多い時間になっていたようですね。ドラマトゥルクとしても、作品がどう見えたのかダイレクトにフィードバックがいただけて貴重な時間でした。皆さんよく気づいてるな、細部まで集中して見てくださってるんだな、というのは驚きでした。私はドラマトゥルクとして、観客は常に100%の集中力を発揮できるわけではないのだ、舞台上のことを全て見てくれるわけではないという前提の上で創作していますが、想像以上に伝わっていることが知れてよかったです。

一観客としても、お互いの気づきを補完しあうことで、より観劇体験が深まりました。

制作側の「こだわりポイント」は絶対にあるので、そこに気づかず観劇が終わってしまうような体験になってしまうと制作側も観客側も寂しいですね。毎分毎秒盛り上がりがある舞台なんてないので、座組が大事にしている重要なポイントについては、事前に観客に公開してもいいんじゃないか？と思いますね。作り手側がもっと発信していったほうがいい。

もちろん、事前情報を特に発信しなくても観客に多くの情報を受け取ってもらえる作品もあります。そのような作品は決して安易な作品だというわけではなく、作品としてドラマトゥルギーが綿密に計算されている結果として、事前情報なしでも観客に刺さる作品に仕上がるのだと考えます。ところが現代的な作品になればなるほど、制作側が伝えたいポイントが見えづらいうことが多い。見えづらいまま提供されると、観客からすれば「あれは一体何だったんだ？」と不完全燃焼な観劇に終わってしまう。そこに補助線を引いてあげることが重要だと思います。

一講座終了後、受講生の多くが「作り手の意図を考えながら観劇するようになった」と話していました。この講座は今後も続いていくのでしょうか？

タイミングが大事だと思います。ドラマトゥルクの仕事を後々振り返るというのは難しく、リアルタイムに制作の進捗や何をやったか、細かく具体的にお伝えできることが一つの説得力になると思うので、ドラマトゥルクに従事していない時期に、今回と同じ講座を担当するのは難しいんじゃないか...という気がします。

今回の講座については、私個人が何をしたというよりも、参加された受講生の皆さんの貢献が今回の講座を作ってくれたと感じています。一方で、受講生が貢献してくれる場を作るのもドラマトゥルクや演出家の仕事です。

例えば、全く同じスタッフが用意されていても、演出家が変われば出来上がる作品は違うはずです。まとめ役である演出家がチームとどうコミュニケーションを取っていけるかが作品を決める大きな要素になる。ドラマトゥルクの仕事は、演出家とスタッフの関係が事前に出来上がっていないときに、そこを仲介し、うまく回るように環境を整えるような役割だと考えているんですね。ドラマトゥルクがいなくてもうまく回る現場はあるはずで、そういう場合はドラマトゥルクはいなくていい。今回の『夕鶴』の場合は、クリエーションメンバーの中にオペラの人間と演劇の人間が混在する現場をうまく取り持つのが私の仕事でした。

ただこれから先、『夕鶴』同様オペラと演劇の人間が混在する枠組みの作品に参加するとしても、例えば演出が岡田利規さんではない別の演出家だったときに今回と同じことをしても現場がうまく回るとは限りません。作品の作り手の一員としては、それぞれの座組の特性なども踏まえて、どうすれば良い創作環境が成立するかを考える必要があります。

一今後、横堀さんがどのような活動をされるのか楽しみにしています。

作品に関わっていくことは続けたいですね。でもそうするとかなり頭の中が作品で占められてしまうので、いくつも同時進行というのは難しいですが、一つひとつの作品に向き合っていきたいです。

また、演劇作品を作る上でのシステム自体の改善にも興味があります。ドラマトゥルギーの考え方をより業界の多くの方、様々な立場・役割の方に知ってもらい機会を作ることが、演劇界全体の生態系というか、全体の環境を改善することにつながるのではないかと考えているので、作品づくりと並行して携わっていきたいです。

今回の講座については、受講生同士の問題意識が近かったのか、講座後もいい関係を結んでいるようで素晴らしいですね。どういう方に参加してもらうか、集客も含めて広報スタッフの力もあったのだらうと思っています。受講生の皆さんの中には感度が高い方も多くいらっしまったので、ぜひ今後も新しいものを積極的に観に行き、その情報を共有しあうような活動をされてみて面白いかもしれませんね。一人でセンサーを張り続けるのはなかなか難しいので、複数人で継続的にやっていく場を作れると面白そうです。私も皆さんから教えてもらったことも多いですし、また私が知っていることは何もかもお教えします。いい情報があればぜひお互いに共有していきましょう。

一そんな場を作っていきたいです。今日はお話いただきありがとうございました。

(取材＝豊島 淳子・文＝井形 翔子)

受講生による
アフターインタビュープロジェクト

講師 横堀応彦 氏
アフターインタビュー

2022年3月14日
オンラインにて

事前に行った受講生によるオンライン座談会＋インタビューシートの回答から寄せられた講師への質問を中心に実施しました。

受講生による

アフターインタビュープロジェクト

3 受講生からの問いへの応答

オンラインインタビューを踏まえてさらに深く聞きたい問いについて横堀氏に寄稿していただきました。

「ドラマトウルクとして今後10年どんな活動をしていきたいですか」

＜開かれたドラマトウルギー＞に向けて

シアターコーディネーター講座＜ドラマトウルギー編＞は受講生の皆さんの積極的な参加によって無事終了することができました。この場を借りて、受講生の皆さん、そして東京芸術劇場のスタッフの皆さんに改めて御礼申し上げます。

今回の講座を通して、私はドラマトウルギーを＜より開かれたもの＞にすることの重要性を再認識しました。私は日本でドラマトウルクと名乗る人の数を増やすことにはあまり関心がなく（もちろんこれはこれで大事なことです）、それよりもむしろ、ドラマトウルク的な思考（ドラマトウルギーですね）に触れて、その考え方を様々な場で活用する人の数を増やしていくことを目指して、これからの活動を行っていきたいと考えるようになりました。ドラマトウルクという仕事やドラマトウルギーの考え方を限られた人たちの専売特許にするのではなく、舞台芸術に（どのような形であれ）関わる人たちが、ドラマトウルギーについて自由に思考して、それぞれの得意分野を生かしながら、ドラマトウルク的な活動を実践するための手助けをこれからも行っていきたいと思います。そしてその先には、舞台芸術をとりまくシステムそのものを改善することにも取り組んでいきたいです。

今回、受講生の皆さんの熱心な編集作業により（これもドラマトウルク的な活動の1つの実践ですね）、講座の内容がこのような形で共有されることをとても嬉しく思います。この報告書が多くの人の手元に届き、＜開かれたドラマトウルギー＞に向けた大きな一歩となりますように。

2022年3月 横堀応彦